



今様東夷奴

初編

文久元一三
82, 初

利 9
3869
46



今樣東萊奴

初編

利 9
3869
46

利 9
3809
巻 46

大正七年三月廿五日
室井平藏氏蔵

かき初まてい月くお君のク名ある今も
かき河のちあり糸のまははちまにー
とみみしるにせー志とのせふの續ふに花を
ありまーのち衣おるの松りともあ
いとーのまーく松の流れ絶せ今も
そむいりせいのちのちのちのちのちのち
まぬあははちのちのちのちのちのちのち
あやあはちのちのちのちのちのちのち
横家あはちのちのちのちのちのちのち

酔も諭めぬれおのれ母衣とあやめ
梓ゆちらうも史劫初夫の本のやほはる
笑を次東きぬの半ぬの敷さあは
おはねおきほるこのせし書志つら
ぬゆるあはぬはははのよの葉はあ
いと採りせらあまき口は結い
はら

常美はききき
ははのし
るのきき又力
秋花う
生か果速



都府庵柏枝撰

折句題 ウエツ

七十

仕立雲霞存紋の蓋妻取々々 半也 花咲

六十五 堤の貝が堤に陰よけく灯り 全

〃 塩も土の露に朝も露し附く生妻 西国 菘唐垣

〃 魚刺る入は涼く月の舩 糸也 生菊

〃 魚十で生キと繋りと連しの後 全

六十一 仕出来る居る小物を連て舟 綿志

五十五 移る自ひと象成乃強イ混 全

アツサ

二百、 而小多子辻浩殿来て子下葉 花咲

九十、 船兵漸なる所と子小清小婦 若菊

六十五、 婦の頃終い見おふく清小生似 梅色 塩空

六、 汗のうぬ入梅の樂座の内隣付 小窓

〃 油の紫つと居續子と煮焼揚 全

〃 船席一候と急ぐ青亀 石丁 玉光

六十、 天窓の敷と念通と煮更し乳 錦志

五十五、 揚物と妻いりやと尻にお葉 心子色 青巾

ナハメ

七十、 多後ぬる美館と目切面坐 若菊

冠り一。先

七十、 一ッ新座二枚垂れんで高薩戸 全

六十五、 一ト開へてくをやう子供女中 梅色 若代丸

五十五、 一寸のが通五分程も延と刑り 青巾

八十五、 先キと掛って水引の結び帯え 錦志

三字 折也 上出束

八十、 上子汲よおのやう箱も世魚 梅色 如舟

卒、家来も立流せし〜布衣上 吾民

五文字 是うる来

六五、焼く側〜抗と喰とぶ 錦志

卒、流し元〜籾を搦〜 五主人

ハ 夏 スル

卒、艶屑ッを子供が海〜がり 徳村也 一 矢

五五、馬入ッの流〜お武家掛り 玉光

七字 上名 叙

九五、流シの血ハ仰りが別ッど 橋也 飲之

七五、銀告蒸〜大高の鼻筋ど 徳村也 ハ 矢

六五、似セ後で言〜ハ豊カど 香梅也 早 喰

玉光を麟〜撰

ケイツ

一五、後〜白ひもあ残の強イ混 錦志

八五、塩〜筋糸で子母〜を厚存 八ツ子也 花 魁

七五、焼耐吹〜て好むせる毒ッ口 花 咲

〇 葱〜け敷子を魚〜あろ〜を 了らマ也 未 遊

卒、実人〜入〜物有るふ付〜用 青 中

辛、仕舞ふ感志いとふ子澄子妻乳露 石マ色 東氏
五、妾定よ指月内流下て妻焼く故 西因 歌六
内を介トて取く心也とばる妻 多正 市丸

アツ二廿

九、为止之衝なつて軒一花音音 新川 早吟
六、持巫女妻気ふ掛る二夜の子 ハ字色 杉任
六十、樊サスる妻いお伽より鳥の祿 ハ字色 市丸
五、坊院へ泊るく一歌も下り ハ字色 五葉
あれは院内夜鳥と見えと客

チハメ

八、香後お酒撒るる酒の瓶を押壁 生菊
七、寮乃る香葉も今人の眼より分 青中
六、料る所又よの字散る面為芋 井窓
五、茶屋流下所は雪蛇の目よ露お 早吟
四、冠り一先 六
七、息吹のく子ふきとくおちお満 徳川色 花雷
六、一二冊かざして本座も目小向て 花魁
五、一樂と揚きぬ初心の出来向客 東遊

六、先キの能い筆新しむ二月女
作窓
五、先ッ息のあつハ嫁乃出る際
杉位

折込上出来

六、来々客が嘸々止手て吹おる葉
秋六
市丸

五、是る夜

六、流々元で船をさしり
五、人
六、誕生はるハ酒を使人
生菊

夏スアル

六、長い橋口を力替とさる
今

男を揃へる旅をふくは
三、夏

急ぐ何ハ寄る乞う
生菊

古今昔々

五、嵐返りの新紙が流り
海志

楽判

中後舎あ茂撰

ウエツ

五、仕舞ふ梳系座より裏括りて
花魁

八十、新粉蝶のお出逢ひの妻喰ひて 牡丹

折込上巻末

七五、来りて客よおの事もはなれども上巻撰 花魁

〃 出りて人説きとて七巻末の八巻 志菊

五巻 是らるる末

一〇〇、先かせりて只衣巻を脱て仕舞 五楽

〃 只 スル

九十、動定りて九巻へ這入り 松佃

古今 上巻 八

九五、旦那の気母も徒らとせ 志菊

樂米

又遊舎如舟撰

ウニ ツ

一〇〇、葛藤左刀脱ひて切進むる物 悟月

八十、仕出たて居る小物と連る舟 海志

アツ ニサ

七五、あゝ二百篇の事でもさるる眼 安茂

リチ ハメ

九五、鳥居に赤い花燈籠も目知な燈籠

生菊

冠り一。先

七五、一番の酒を配る新

徳利色

福帳

八五、先キを指さぬ酒合のむき音

又色

松琴

お込上出来

九十、宿下り来り見上る子の世

早吟

楽判

酒淋堂歌源撰

アツニサ

一五、厚く皮包りあまの旬は酒換

市丸

七五、婦の唄路いんあつく酒合似

塩定

お込上出来

八五、落の角の酒を屋上へ眼で出さ小兵

生菊

まき色がた楽

九十、境川を四つで押出

全

日な

七五、悪徳ウが振身で花迎

全

古今略記

九十五、きしひで有り有る薪を用ひ 桑 田楽
 七十五、あけくふ憎あが倒ま 玉光
 冠り 一筋の長い虫も出く 海心
 了り 唐を清めたり晴し之意を察 和好
 名人 年長の人の背中が冷みよ 松月
 〇 牛車か 膝へかゝり 九吉
 〇 小倉の尾で家他を雅ふし 生菊
 夏 中 筆を丸利で拵へ 全

次會 幸問仲夏廿七日閑卷

丹頂翁一巻撰

折句歌 加ノモ

一百点 二三日居別離む嫁の涙も夢 幸中
 七十、 飯の宅いけ逢し妻ハ懐く胸 スミ 路言 孫志
 空五、 羅ふも是負ひて芝居屋の法 繁花
 〇 幸いあはれ也く抱て侍り外じ 繁花
 卒、 〇の〇知あめ色々々葉よ透く雛 幸中
 五十五、 替る時代も了ら母の拵振る 生菊

〃 完帝可也い子の足櫃の取 牛也美咲
折る歎 似キム

辛、 銘酒の滝よあらしの難旨い取 不奇 サカキ

五五、 色も堀切りに戸付傍紫地 不奇 院波

折る歎 タツリ

八五、 たくく一斗粒出と見りる封子紙 今

八十、 之ッ埃り裏に及び身も振扇 出菊

辛、 壁も筋付て火入しも宙生の雷 院波

五十五、 一歩ひの更も依り初も海に流 出菊

冠歎 山。程

七五、 山二ッ衣波落ふも持り乳 休意

辛、 山吹色よき人三事も付るお茶 出菊

五五、 山形の戸張りの世帯深き裏 美咲

〃 山は燃ゆる古白も地は無人の意 雪中

〃 程ふも柔花紫し之も色子の意 歩意

〃 程ふも春やと梅陽て閑く胸 美正 院波

折込歎 火入

九十五、 大樽の音腐入りりも柔語く 松有

五、 肌の風入きき聖座の火多敷
 六、 雨く火門也通のしるる陽気
 七、 勝つて入る溜り火行拭く家敷
 八、 夜仕衣子よ終い深みの大浴心
 九、 心む勝り火をを振って通今葉イナ
 十、 日の入りよ坊も火きくあつと秋
 十一、 五文字歌 あつけよ 秋の色
 十二、 壺へ虫く飛込込こ
 十三、 草の葉乃其花よ落か来
 十四、 錦袋
 十五、 生菊
 十六、 如舟
 十七、 工子リ
 十八、 綿志
 十九、 生菊
 二十、 桐月
 二十一、 生菊
 二十二、 綿志
 二十三、 生菊
 二十四、 桐月
 二十五、 生菊
 二十六、 綿志
 二十七、 生菊
 二十八、 桐月
 二十九、 生菊
 三十、 綿志

月 佛閣 詠

一、 浴衣の掛ひで船うらより あ茂
 二、 夕やけの海乃系色ど 生菊

竹窓舎五風撰

折句歌 カイモ

一、 風の橋鏡交鏡舞成る隣り 生菊
 二、 江雪ふる宿未交神興よ掃る水 松月
 三、 鏡裏殿ふ四而み鏡の舌 覽皮
 四、 榭へ帆を入き娘の掛を祭 生菊

〃 加へ玉粒入るる手拭枕の葉 今逢 千鶴
〃 空暖計は暑も涼も不覚時ぞ 松琴

折句歌 イキム

二百、 入るる玉粒胡瓜の葉の虫割く 千鶴

七十、 物生まじくと命子の降る村はひ 生菊

六十五、 眼もらるも遅うかき糸の無き程 覧波

卒、 居る氣もくまも合研の山の中 赤坂

〃 歌ふ虫ギヤミン曲くくをを蛇 今逢 万歳楽

折句歌 タツラ

九十、 たまらぬ暑を天をふいごよ子 早喰

卒、 便りなはた身耳速く富土をり 青牛

卒、 玉もあつたお水よふりり出んキ 今逢 舟頂

〃 縁成り妻はら場の犯りんセ 生菊

〃 たしじと氷もあつたのぬを礼 錦志

〃 歩く電掛る道不二の終 覧波

〃 立ち場のまつるおつむ船の中 松琴

冠 歌 山。程

卒、 山斗りあちあち梅の枝ひ夏 今逢 桑人

〃 山崎朱利キ自七鼻子かけぬヒ 生菊

〃 辛、 宇野や木魚飯を吐ク文動メ 全

〃 〃 山乃工進ルテ紫衣遊ル虫 丹頂

〃 〃 山の谷を深クも目也くと書ク五日 みまよ 五江

〃 辛、 龍よりの笈陰影も松え 同乐

折込歌 火入

〃 〃 大腹目利キ一入ウと馬の樂 五乐

〃 〃 辛、 喉も大概疎入レし知る妻 松有

〃 〃 辛、 大鼓の擗りも入レと華國弦 白雪

五文字歌 なる所ん

〃 〃 辛、 竹角の日掛をふんまけ 生菊

〃 〃 明けよ 色

〃 〃 辛、 糰味嚼の力豆を出一 全

〃 〃 神社スル

〃 〃 〃 寄書子拂く流しの子を授テ 全

滑稽尾 吾民撰

〃 〃 折句歌 カイモ

〃 〃 〃 〃 坂屋も廣くと妻お代の物おひ ト有 一鵠

七十、 書く約束未餅手の冬子(原) 善嘆

〃 逆るるの一寸の励む法を総 筆キ

六十五、 買ふ虫園の瑞瑞草作字の字 菊壽

卒、 河骨を活る子秘るの物(葉艶) 善嘆

〃 河骨の活る水も枯ら葉艶 新志

折る歌 似キム

九十、 月人のおお衆蒼々娘を尾 松月

七十、 松の葉のいと大なるの海村秋 共菊

六十五、 一本よ木振根の旨い麻 新川 和光

〃 五十粒川清し出後よむと人 心嘆

六十五、 眼と目の静室を空か輝の空巻 覽波

折る歌 夕ツリ

一百、 三々指も静投のよら飯 袴 一矢

七十五、 田植の費白碑の彫りも海(葉) 新志

七十、 寶ハ二六の和もろく 初孫壽 青中

〃 立樹よ平下果き活を絶(水) 松月

卒、 撓るかきのも生を遙て風情葉 九吉

六十五、 民の汗流す百倍と延る秋 青中

五、 打てたる水鶴ゆく案内 和好

冠歌 山。程

六、 山肌と寄飛又透塔の灰 お笑

七、 山智も若くを流く東窓 松月

八、 山依能く上り旅半大蛇 和好

九、 山家集予に和歌^キ 生菊

十、 程好風も居る由は女婦人 空

折込歌 大入

十一、 大学の入門望い子ハ袴 一鶴

十二、 大活の子ハ程半の袴 孝人

十三、 大和路也残敷の入り 生菊

十四、 老入を披と大子ハ妹の孝 和好

十五、 大奥も一雪花^ハ 青仲

五文字歌 夏が肝ぞん

十六、 床のつるも水がより 生菊

日 神社仙居

十七、 美しハ鳴田の地ヒ 市丸

樂伴 号^ハ 尾高冠判

折句歌

カイモ

九五、かゝり紙入帷子の紋物を

生菊

口

イキム

七五、急ぐ體も日も暮るゝ燕二階ハシ粟舟

口

タツソ

一五、立の埃の妻に反り身は振る扇

生菊

三五、出接水と子の轂のふれ面

青中

八五、まじり果て静定は立の孫子指

早塔

之文字歌

あつけよ
とらま

九十、お清ひく味留雁を出うけ

美人

楽評

枕考(高松節制)

折句歌

カイモ

一五、鏡を例入お清一葉のう移

生菊

九十、編矢大工簞も日小紅箱の物

美咲

冠

七五、山河を渡り子も泣く物

如好

之文字歌

あつけよ

九五、影も無く泣きながら定まり

丸吉

寔月尾草猶撰 續會水五月廿七日開卷

折句題 之ヨムへ

一百矣 上手母より市子子のむやみ^{アツマ} 葉子

八十、如妻と子と婦庭出の意は著 出菊

七五、志く妻也知たよ二人り母を別 全

卒、麻と糸味能、裏針て孫の表 鏡波

曰 コレニ

七十、是くく見れハ沙もも二重程 出得

卒、子も欺さまで茶春む苦知以^{アツマ} 葉民

六、苦む荒きてむの候に仁まのち
五葉
五其、是ハ先礼藝一寸手を匠にせり
葉人

折る題 サタリ

七、うめんて袂落し丸く布
ハツ子色
一向

辛、磨り出さるる六葉の生葉葉
秘志

五、度々懐の立縫衣の又近
菊壽

〃さぶりの持盟も妻の袖へ
鏡波

冠題 目。出

七、目よ運入る針も髪よ妻は書
一向

辛、目わりの傷も細く葉葉
秘志

五、目高の針と淡島のたの味
卍意

九、出さおみや袋の口も子信山
九吉

七、出る影も寄の霰作向く鏡研
蟹籠

五、出さ結も門、逆矢よ葉の下結
生菊

〇出さ産の果も葉も結も葉葉
九吉

五、出さ果の味も葉もとめて門
葉舟

折込題 田氣

七、葉よ葉も折らて田地の上尖ケ
柳陸

竈、稼陽氣存子風情も雨田川
一矢
卒、伝回者田舎里氣の姉姑
丹頂
五、田のむれ夕顔綴の言伝
牛窓

五文字類 集

五、忍び込んで難口を写し
生菊

日 竹巻

五、筆の香か明方を嗜り
九音

日 紙テスル

五、軟く滑って大ききゆる延び
桑糸

五、目を引付て六のうま成り
生菊

日 手を引くわくを色し
全

五、二々親の附くる清新ど
松個

青々舎笠筆撰

折句類 三ヨム

一百矣 又と身嫁産所出てむる魚
一向

九十、暑も替るお店の香を妻湯の香
全

六十、白鼠を横掃姉も虫の籠
鏡波

五、酌のよもよろけ捨子の旨い形
書梅 壺陰

日 コレニ

七十、此處へ連きてよる所も牙子六枚

子鶴

五十、是うらなれハ是と妻手も編む

書中

折る題 サタマ

七十、揚湯も強き小舟よ案乃瓶

生菊

六十、三枚目とと案乃瓶耳離ら

五美人

六十、先きもこ記是瓶もだんすけら長五歳

書中

六十、之安の本玉透る通る案の垣

全

六十、座の端のさみだう折の又逆ひ

菊島

五十、三ふつり遠若深く子の下よ合二

錦志

六十、さうとみ立出くさう案の冠

松月

冠題 目。出

六十、目も重く釣物りりくんを芝居

丹頂

六十、目先きうほし(のろま)の尻を毛

菓子

六十、目形りよあまを扇の柄打く灰

一向

五十、目へ運入る針もあまを妻の着

全

六十、出る嫁も門途火より母あ下結

生菊

六十、出る敵も志の荒作向く鏡研

蟹瓶

辛、出と床机多うも蔭の所し
辛、出の疎く若も砂糖湯の末多
日、出と床机ハ所場而徳を吹通し

舟頂
錦志
東民

折込歌 田氣

七五、夕ア死の胸ととや、因南と銅
七五、おめてんる妻田易と意味多

丸吉
筑波

五文字歌 集

七五、虫歯の生しとやう思ふあり

生菊

日 詩集

七五、長い簾が吐けと掛り
日、大強きをこつ田が吐くと免

玉光
工子リ

日 紙テスル

七五、あい地面をぬきんで仕舞
七五、世上一舛枯文と高い
辛、泣やむ坊り一巻の吾世
七五、大酔舎右甚末

菊壽
雲丹
生菊

折句 サタリ

七五、若山傘の鶴卵浮雲と也端

梧月

冠

九五 出と茶の荒大名の懐切リ日 東都

九六 出牙と彩帽のつとつ寺 生菊

九七 出流子い物、就母冠、時半字 丸吉

折込 田之茶

一頁 樂の氣を拍り、田畑の上り火テ 柳樹

五文字 紙テスル

半、折目正しく娘を頰ケ 生菊

樂 榮久尾一矢刺し

折句歌 シヨハ

九八、志とあやむるよこ入り多列 生菊

日 三レテニ

九、極子の粘り難あり様事の額 舞喉

日 サタリマ

九五、榮標の蓋で唾啼く寮茶書 全

九六、河子徳より片も沈む松の琴 生菊

冠

一頁 出拂って川岸に船母ら引子の路 菊吉

七五、 出見亮始も杉形りま鑑へ不二
 カイモ 買ふ上布いつと小指の拍忘き
 左甚
 名リフ 立白の初ま鑑も能い舟形仙
 全
 日 焚く鯛妻汎形と炊子友因以
 形源
 冠 山柳まきと茶室の子窓子縁る帯
 全
 形込 能き行の連き足因庭ま揺る巾
 一鶴
 日 大和因丑の日ん世陽気忠厚骨
 菊拙
 日 蹴田縁の守り妻の意さこま乳
 福悋
 日 出たる也の咽も可忠いお猿侍り
 正子リ

言ハ 暑も張張いお始もちと減つて西
 一 笑
 芝ハ 之朝家形舟の中支障り
 松忠
 集 交さ返一く荒ラを云い合に
 全
 竹ま 深川ハ久一く焼テ炊人
 松佃
 紙亮 虫の出さ子を大事ま云月テ
 松佃
 言ハ 糸を氣嫁お水子向ふ側
 珍志
 コレテ 衣着て蓮根も出さ寺料理
 全
 日 小舟の晒落もべし竹の出るも拙
 全

折込 巾白地七折お乃案買糸 珍志
 内 籠るの氣も勇む神田ノ納言 全
 之ヨハ 仕荷子厄ク能くたふ摺出氣等々 和好
 菱マ 懺悔を信る六部丸春本候 全
 冠 出来て一の字も生束くる子母性 全
 内 此と案案合款入る連の勝勢 全
 中 穢の似星を拜々 全
 サタマ 醒く碎且那新案も案の梅 松月
 コレニ 醒よ釣るも教生ふ知る利根 全

折込 壺も張る好々妻の氣も合村田 全
 内 氣も附存生留る古い梳の氣 全
 中 猶つと番案を日言ふ事案 全
 コレニ 小高りもとれや侍の情い瓜 九吉
 サタマ さら教故たきうすおて侍生番妻 全
 冠 ぬぬとゆ坊あ誤炮のこまろ書了 全
 中 粒を立よきやうて巻とケ 全
 紙 伊勢のお家ハ大子又まど 全
 之ヨハ 深い危世を多子尾のへごる垣 菊壽

コレニ 急の夕の聯源氏名のみし以雅
 日 漕く船連し堀を今物寄る
 冠 空と人のさるるはきほり水
 お込 大石の碑の落俗気い飛田
 コレニ 山雨よ濡れし筆ねまは出る
 言ハ 志多神長あは船の角の肘
 冠 月の光て碑碓よと林志長
 中き 和因合戯を後庭またき
 残死 娘が親子を遊んで喰せ

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

日 玉を籠めて先きを繰り出
 日 出糸を他つて出水を防ぎ

全 全

今様 吾妻夜 終

主 體 和 好 志
 九 和 好 志
 丸 和 好 志
 桑 丸 好 志
 招 丸 好 志
 共 丸 好 志
 桑 丸 好 志

